

4 3 2 1 0

JAPAN

BRUNNEN

4 3 2 1 0

• 0 1 2 3 4

遠

1192
2

登淺

會本通俗排悶錄

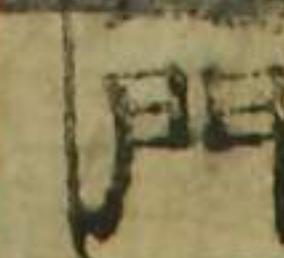
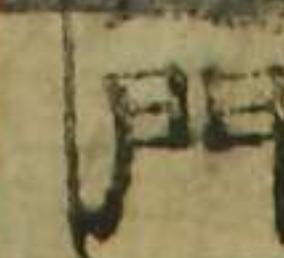
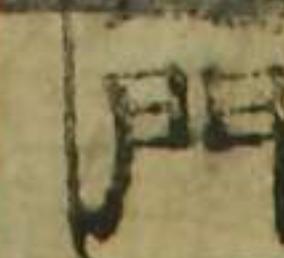
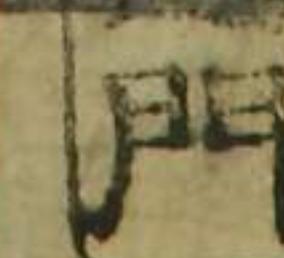
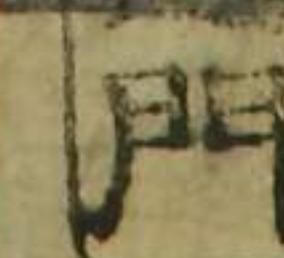
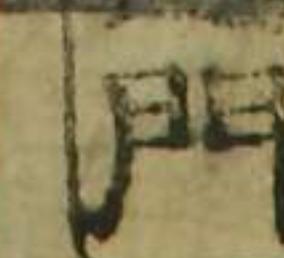
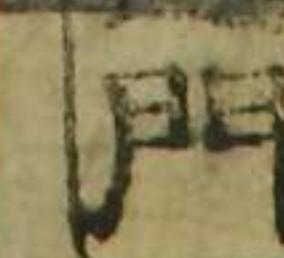
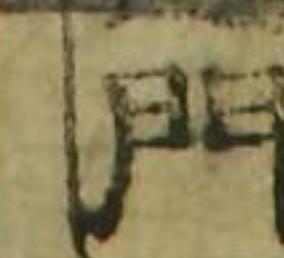
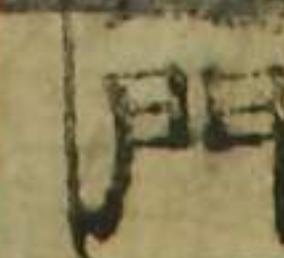
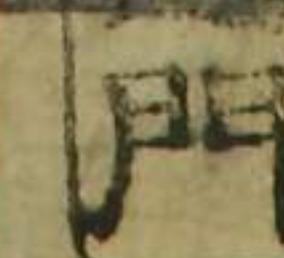
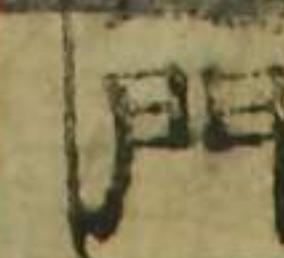
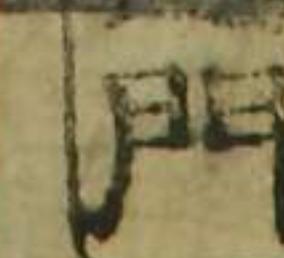
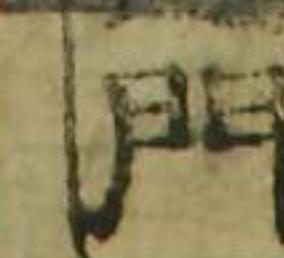
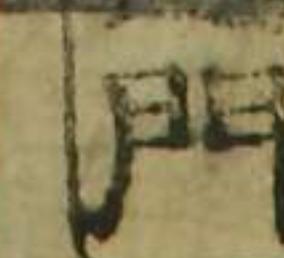
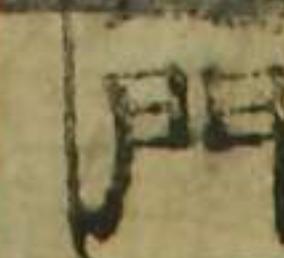
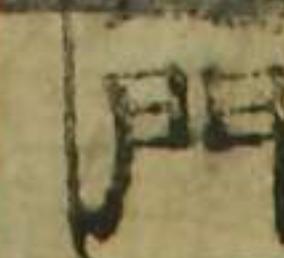
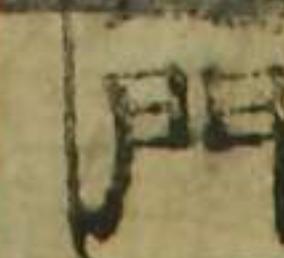
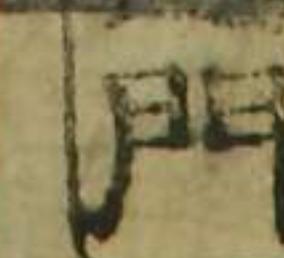
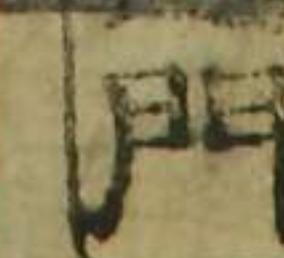
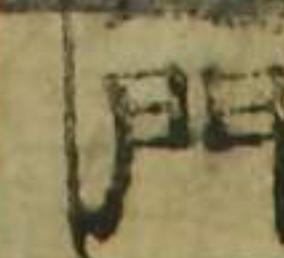
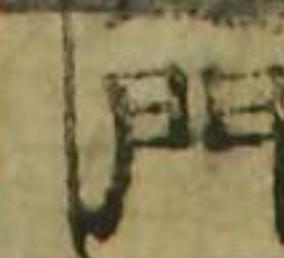
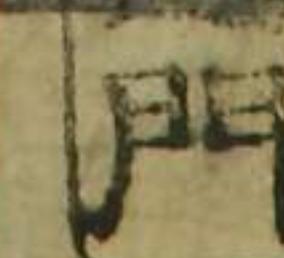
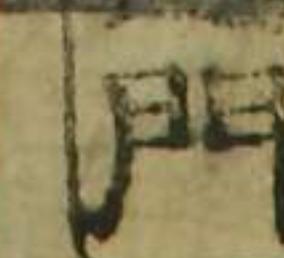
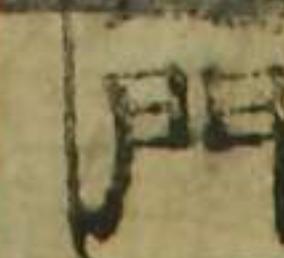
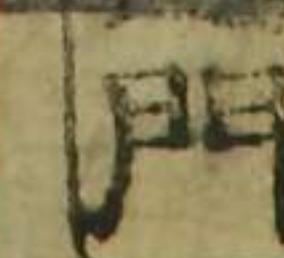
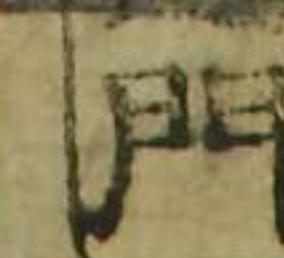
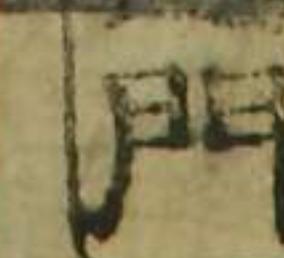
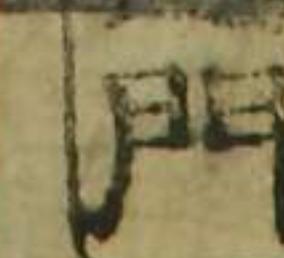
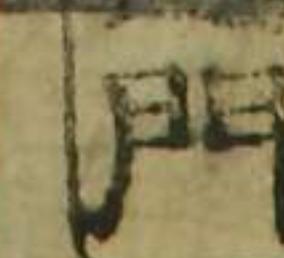
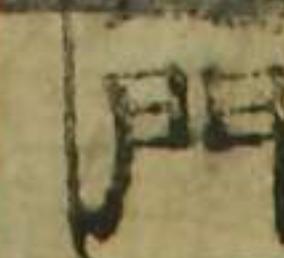
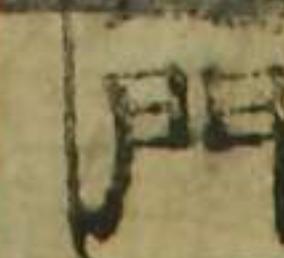
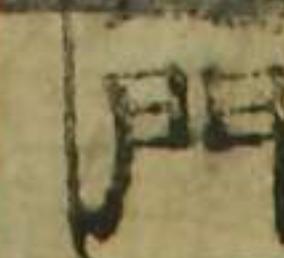
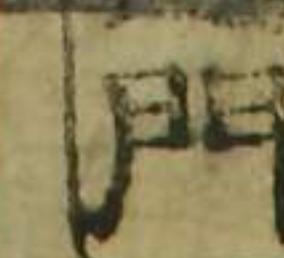
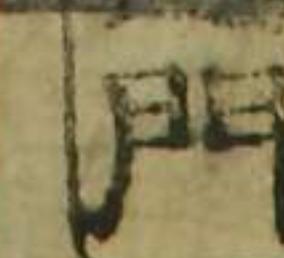
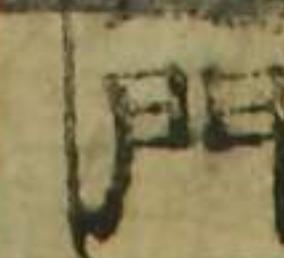
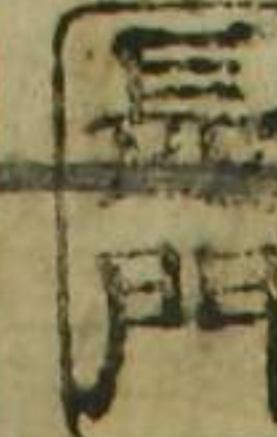
前篇二

告白

凡そ此の卷中見返ハ勿論其他にて聊う余白あれど
或ハ猥褻なる畫圖を寫一或ハ卑俚ある語辭を書一
其の甚しきよ至りて挿圖を彩りて却之を涴ましめ
塗抹して以て其の何とぞを解する能ひざむもよふ至る者何
何ぞ其れ思ひざむ甚き乎夫れ此書籍ハ我が貸して
以て業とあひ所のりなむ故よ之を涴がまよふ於て頗る
營業よ損害あり營業ふ損害あらん於てひ之ねつ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此ふ告白一置と云爾

新稿

長門屋主人識



通俗排悶錄卷之二

忠義之部

張夫子

六
樹
園
筆
譜

張夫子
全真正直
校
明の崇禎年^えの初^そ。永平^{ひやく}名^なの兵備道^{ひやく}
地^じの兵備道^{ひやく}道^{みち}へ散道^{さんみち}。
西^{せい}名^なより孝廉^{こうりん}親^{おや}ふ孝^{こう}あつと廉直^{りんじき}の
徳^{とく}ある上^{じょう}より櫛^{くし}まれしも[。]
張春^{ちよか}ゆく戰^{たたか}いが力^{ちから}つきよく生^う捕^{つか}まし。太宗皇帝^{たいそう}の御前^{ごぜん}みひえ出^ださる。されば
屈^く服^{ふく}せど衆^{しゆ}之^を殺^{ころ}さんと欲^ほき。上^{じょう}許^きす玉^{ぎょく}陛^{はく}闕^阕廷^{てい}禁^{きん}裏^りみ至^{いた}らよめ其^{その}
忠義^{ちゆうぎ}を高^{たか}く。と賞^{たんじ}ト多く旣^き下^{くだ}の士^しみ命^{めい}トく。張公^{こう}外^{がい}從^つく學^{がく}ぶべし。との
玉^{ぎょく}へ。張春^{ちよか}も亦^{また}辭^させど教^うかふみ道義^{ぢゆぎ}を以^うてと。皆^{みな}歎^{たん}べく之^を事^{こと}稱^めしと
張夫子^{ちよか}と云^ふ。至^{いた}する必^ひ南^{みなみ}向^{むか}。明^{めい}の都^に終^つみ清^{せい}人の如^く雍^{おう}羣^{ぐん}毅^{いき}せん^{しん}上^{じょう}

曲く之ふ従へ臣下ふ哲く曰。眞の忠義の人也。汝等之ふ学ふべし。
張春卒す。又及く上深く歎息。玉へ旗下の学者紙錢を以て奠
く曰。敢く清德を汚さずと天下定まると後世祖章白皇帝燕都
入せふ。侍臣ふ哲く曰。卿等昔日張夫子あり。余知是り。南國
ふ唯此一人あり。然うか之を穢者ちとぞ如何ぞや。との玉ひ多。

閻典史

閻典史 閻氏典史。官名。四世の祖某と云者錦衣校尉。禁中を守る。始北直隸の通州の
國の人也。應元掾史人下役。トヨ起立。涼倉大使とある。崇禎十四年江
陰地の典史とあり。始く到る時海賊あり。船百艘なり。小懾をよそく。潮

み來じて至る。吉とく内地ふ入る。其勢猛ふとて城ふ近づきぬ。縣令へ此
時旁邑近村み従ふ跡あり。丞も久主簿も恐き怖きく男女唯外
ちるぞ。時ふ應元刀鞬を帶馬を躍ら。且く大ふ市ふ呼く曰。好
男子。まん者へ我み従く賊と殺く。家室を全くせよ。と呼々。此声
と聞く従ひ集る者几千計。や。も械のうたふ苦しむ。應元又馳
く竹ある處ふ至く。呼く曰。事急あらへどふ一竿を假せ。直へ我より取
りと云ふ千人の者江岸に列り。並びく弓を林の如く立て。應元
かきこあらへ矢を發り。一夫を放て。賊一人を射殺。もづけく
賊三人を殺す。賊恐く。船ふ登り帆を揚げ去る。巡撫官に
應元功を奏す。勅く都司役ふ仰有く。應元を江陰地の扇ふ仕す。徵

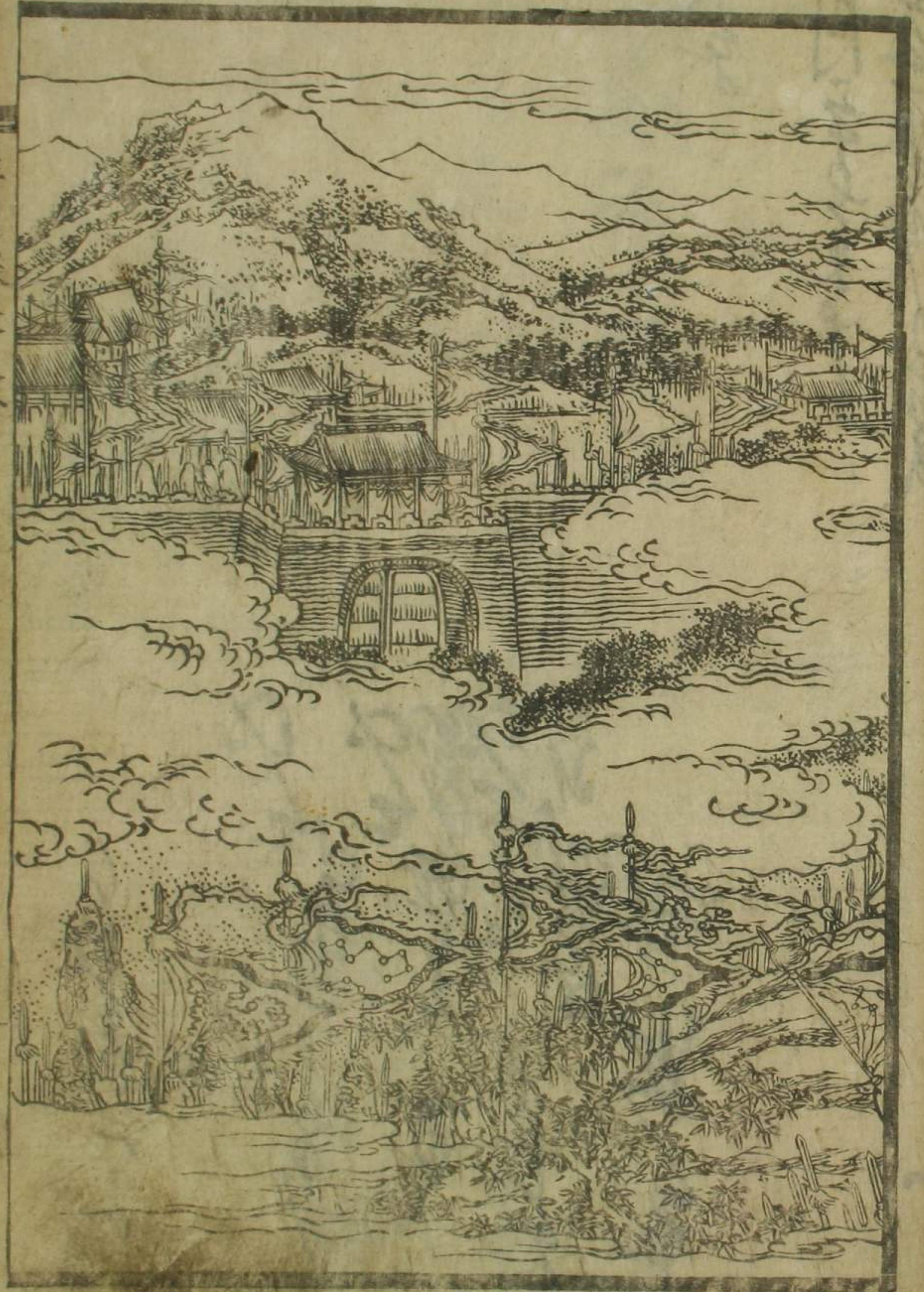
巡めぐらしとく田たと賊ぞを捕つかる夏なつと主ぬしどもし。是これより黃蓋こうがいを張はり、壽縣じゅけんを立たてく。前驅道まへくみちを清きよつ行事ぎぎょう格外げかくを免めんさむし。邑入保いこいほうりとせや。文ふみくと勤功きんこうを以もつて廣東こうとうの英德縣えいとくけんの主簿しょぼくとある。陳明選ちんめいじゅんと云い者もの心こころ元おの代しろと江陰こういん地じの扇あわと成なり。應元母おもの病びやくの依よくに従従事じ行ゆ亦また國くにの變かわふ會あつひま。家中うちの者ものを引ひつまし。邑東いこひがの砂山ささん地じ名なふ居ゐる。此歲このとし乙酉とうしゆの五月ご月つきあや。此時清朝ちうせうの天下あまを得とく。改元かいげんと順治年じゅんじねんととる二年にふあこま。豫あ王おう親王しんおうの大軍だいぐん江え渡わた。金陵金陵名なを降おく。君臣きみしん出でく走はる。宏光帝ひうかうてい尋され。執つからと王おうと清せい名なを貞まこと勤きん大將だいじょう及およ它將たじょうを遣おとし。東南とうなんの郡ぐん縣けん成せい取とる。國こく々ごごの使し或もへ降おり或もへ走はる。又また門もんを閉しく距はむ者ものあや。之のを攻こうえ輒たま拔ぬき速すばり。時ときを以もつて計そなべ。遲おそも十日じつじを過すぎ。京口きょうこうの境さより以もつ南みなみ。

月つきの間まふ名城めいじやう大縣だいけんを下おさむ。百ひゃくを以もつて數かずへ。江陰こういんの地じを彈丸だんがんの如ごき下お邑いうとと。堅かたく守まぐ故ゆゑ八十餘そじゆ日ひわづくをくく下おま。是これより應お元おが謀ぼふ。初はじめ薙髮なげひをばんの令いれ下おさる。時とき。諸生しよせいの許用德きよゆうとくと云い者もの閏くわん六月ろくがつ朔しやく日ひの明めいの太祖たいその御容ごようを御倫堂ごりんどうに奉まつ。孔子こじんを祭まつ。挾いれけ。衆しゆを率たどく拜まつし。且また哭こき。士民しみん集あつる者もの萬人まんじんをう。此時新しんの扇あわのうり。陳明選ちんめいじゅんと推す。家丁けいぢやう四十人じゅうじんと率たどく夜よ馳かく城じやうふ入いる。此時城中じやうちゆうの兵ひやう千せんを滿まつ。家數けいじゆ僅きん一萬いつまいをう。又また糧りようを出ださふ所ところう。應元至いた。人數じんじゆを算さん。日ひ見み櫓やぐら。晉清きんせい。民みんの一戸ひとと一男子いっしやくを出ださく。城屏じやうへいの乘のせ。餘よ丁ていを

つと。清軍是れあらへて死せる者ヨア。其よろ大礮を以て城を撃
う。應元鉄葉あり。を以て門を裹り。鐵の組を貫く。且衆護る。又
空棺ふ土を盛く。墳ノ所を塞ぐ。敵又北城を攻む。北城ふ穴明き。瓦
入ふ大石一つを運び。壘を染くる。一夜ふと成どり。城中矢少
きが故め應元計をめぐる。黒夜ふ幕を束ね。人形を爲す。燈を
り。城中の兵士垣内ふ伏。鼓を打く。叫べ。其体繩ふ下まく。城
を出く。敵の營を襲え。とまふ。似方。清軍大ふ驚き。矢を射る
より。兩の如く。夜明く矢を浴する。射る。清軍大ふ亂。且相殺死せる者數千。清軍
の營ふ入。順風ふ火を縱る。清軍大ふ亂。且相殺死せる者數千。清軍
城を卻て離る。三里ふとく營を作。清軍責ゆ。且主が帥。大

の劉良佐と云者。騎馬の兵を従へ城下に至りて曰。古閭君と相
識るや。我為め閭君の言へ相見えんと欲せと。應元城上に立と共
ふ若る。此劉良佐は宏光帝四鎮四ヶ所の要害の守護の一人ふと。廣昌伯廣昌地名
の封せども。然の清み降と今兵を總る者あり。時ふ應元が語て曰く。
宏光帝をであ走り江南明の都今主す。君早く降と富貴を保ら
べ。應元曰。某明朝の典史小役の之然也大義を知り。將軍へ國
の重鎮重役江淮地を保り更と敵の爲あ前驅そぞまをを抑何の面
目ゆりく吾邑の義を知り。士民を見んとする。良佐此言を安と
懃く退く。應元體大きく面蒼黑あざか微髭ひげ有。性嚴毅生々きび物ごとき
ふく跡しるめ令明肅さうして意氣ありとども。ある。法を犯せ者あくべきびく仁

置く少許すこ。許さず。さとも財を輕ん軽んどく賞賜しょうしを恵む隻ただ。傷
死者じきしへ必ず割口を裹くる。戰死せる者を斂棺りんぱんを厚く之を葬
也。祭まつ焉あく為なふ天てん也。壯士と語る時とき必好弟兄と稱いふ名を呼べざ
け。陳明選みんめいせんへ寛厚柔和くわんこうじゅわあつ人ひと也。城を巡る毎ふ其士卒を慈み。
勞りょうと事ことふ依よひて涙なみだと流ながせ故ゆゑふ二人共ふ士卒の心をゆく。皆此人のる
ふ死せんと勇む。是より先まへ親勦軍しんぢぐんと統とう地ちを取らんと。蘇松そくそうと云者
來ききりふ郡ぐんを破くだ。師しを率たどく此城このじやくを攻いかふ。將まさ者しゃ両人りょうじん生捕おとしと
降おちりて城下じやくしやくふつと來きて跪ひざき。兩將先まへ泪なみだを流ながせ。應元
城上じやくじやく罵ののして曰。敗軍ひさいんの將禽まさきと成なり。速はやく死せど何の爲あふ泣なみだやと
呼よう。清軍せいぐんよそ入いれと遣けんて。渝おほて曰。四門よんもんを守まつる長ながき者もの各大



を斬らば即園を解べと云。應元声を厲く曰。寧吾頭を斬る共
何ぞ百姓を殺さんと之を叱つて去しむ。中秋の時ふちもけとば軍民
ふ月を賞ざる錢を與へ其入を分ちて引つゞく城ふ登らしめ酒を飲
ノ。樂を制して五更の比善謳入者を唱へ。斯するに三夜あり。則
勒想へふ此城内降る意ありと云ふ。攻る事愈急あり。鼓鼙書
夜絶せ。百里の地是が為ふ震動せり。城中死せる兵日を積く多く。
天聲聞えく止更あ。應元義心を勵て櫓ふ登て米配す。意
氣自若平氣とて常ふ寝らど。一日朝より大雨降て日中の比紅
の光一缕。土橋より起て直ふ城西を射る。時ふ城俄ふ陥り。是清の
軍より大石火矢を放てる。清軍烟霧兩を分く群て城ふ登る。

應元必死の士百人を率て突て回て戰豆八百人或殺さる或傷つく
者千を以て數入再門ふ至。且戸門閉て出るる多るむ。應元免身を
と度て。前うる湖水の身を投落ふ。水項を没せ。劉良佐軍中ふ
令しく必應元を殺さりて捕獲と云。遂に縛せり。良佐乾明
が足を延じて居を立て。應元笑て曰。何を笑する。事をひか此ふ至る一死あ
至る。さく貝勒ふ見え立て坐せ。一卒鎗ふと應元が脛を貫く。
耳と。さく貝勒ふ見え立て坐せ。一卒鎗ふと應元が脛を貫く。
脣地ふ暗びぬ。日暮て應元を栖霞禪院名を。寺院の内ふ繫ぐ。僧夜廻
ふ。應元大呼り。速く我を殺せと云。終夜ふ殺せと呼鳴。俄
ふ寂と吉。従て死ふ。既死ふ有き。應元城を守りそ

清軍の攻め。ふせん守る。八十一日。清軍城を圍者。二十四萬人。やく死せる者六萬七千人。巷の戦ふ。死せる者又七千。傷つくる者七萬五千餘人。城中死せる者五六萬戸。巷が満り。然ま共一人も降る者無かり。城破る時。陳明選。ろちびすら成て大の戦へ。兵備道が至り。と身重創を負ふ。刀を握るやうに壁上に倚るやうに仆す。死せり。又或へ門を閉ふ。火を投げて死せりとも云傳へ。

張 裳

張 裳。廣東布政陳選が吏。明の成化年中。中官の章眷と云ふ者。廣州を守り。恣ふ民を虐す。時ふ番人の賈をうな者。ふカ麻と云者。船を海上に泊め。蘓門答刺國。麌の国名の貢の使と詐し貨物と

賣らんと。章眷利を欲するが故に之を許さんとも。陳選其詐ある。知りて之を逐ひ遣る。章眷又越入王凱父子を海上に遣す。私ふ番人の貨を買りしむ。知縣官ある高瑤と云ふ。王凱を執へ其職を發さ見る。巨萬わゆ。陳選都ふ之を訴へ。時ふ巡撫都御史目付。宋旻を下へて向へ。王凱。宋旻。章眷を畏れて詰む。陳選書を呈く。高瑤を獎美す。章眷を。陳選を恨む。陳選と高瑤と官物を貪り。と告ぐ。帝大に怒刑部員外郎。刑部の役人。李行。允ふ巡按御史。目付。徐同愛。仰て之を薦さしむ。行と同愛と皆章眷を阿す。計く陳選が黜け。張殿が黜け。張殿が賄ふ。陳選が罪を負せん。を頼む。殿後李行。其時張殿を囚へ。呵責をうむ。張殿が曰。死せんと

うづく死せり。私の憾を以て公義を滅し。正人を害せんと云ふ
従ひど。李行終の陳選が罪をあびて曰勅を矯と其属吏の官庫の
粟を遺すと云を以て奏を。陳選思ひもど徒罪。徒罪ハ極き罪を流す者
の料を蒙る。南昌名ふ至く死たり。友人張元楨此を葬る。名も張殿京
みゆく廟に至る。上書して云々。臣聞ひ周公の元聖也。も四國の傍
らづく疑を致せる。と君ふ免せば成王四西うや觸せし流言とせく
大賢ひく三至の吉弔を投するを母ふ免せば周公旦を疑ひ多
を殺せりと三度嘆き。是皆口ハ能金を鑠一毀モ骨を銷もざ物也。故
其子を疑ひ。更に是皆口ハ能金を鑠一毀モ骨を銷もざ物也。故
あり。陛下の明うる。夏日月ふ同く。恩ハ父母の齊し。何ぞ古日の中尚
届ふ羅也。覆盆の下復寃ふ沈むる。や。竊考ふ廣東の布政使
1

重役の陳選少しく寔學と崇そ夙の孤忠を抱く。群邪の間の處
官名。陳選少しく寔學と崇そ夙の孤忠を抱く。群邪の間の處
寝争の地に立てる。内官韋春番人の通せるる發を。知縣高瑤に委
察も。陳選書ひて之を焚む。不直と正モハ監司の職あり。宋叟徐同
愛勢を怙かを保。諸をく其意を恣ふせしむ。陳選を誣く。貪もり
ト聖聰を焚火を。李行命と受く。訊と雖韋春が頭指を得て貪も
かく。陳選を罪人となす。臣をよろく。小吏あり。誤ある。以て法の觸え
かく。陳選と罪ふ。陷さんとも。臣小吏あり。と云共昧心を以て是非を判
じ。韋春乃李行を以て。臣を罪人と云く。鞭うる。数日身中完き膚
う。李行韋春が言を承引く。陳選詔を矯く。粟を其属ふ與へ

其報と厚んと云と云。是へ共妻を歎く夏姫と。共妻の眞妻。夏姫の淫婦也。伯夷賢人を首陽を詣て盜跖（まき）盜跖（まき）と考る。近年嶺外の地大水也。山が飢死を詣て盜跖（まき）盜跖（まき）と考る。近年嶺外の地大水也。民食す。凡物存（よ）。泉藩（いずみはん）之を守るが如く。陳選獨（ちゆせん）ある。憂奉（ゆう）。上命の下らんを待時へ民の命絶ぬ。仍く賑（まつり）。救う。民の命を放たん。為う。他あらふ非ぞ。陳選性（せうせい）と剛（ごう）か。罪無（むし）。奸人の虐（ぎやく）を受。償（めぐらし）。憲（けん）の任（にん）。旬日めく殂（そつ）。李行速（りこうそく）の死せん。成幸ひ。病中藥を與へ。其養子を韋眷（ゑけん）を遣（けん）。陳選（ちゆせん）卒せん。戒告（けがく）。喜びぬ。小人の佞毒（ねいどく）。此の如きを致せり。陳選行を潔（きよ）。諂（こね）の罹（なま）。君（くわん）遙（とほ）。誰（だれ）其冤を訴へん。臣罪を以て。斤ら（きんら）。死と曰日（いわひ）。申せ。身へ昂（あが）。負人（ふじん）。惜や（ちやくや）。忠廉の士を痛む。外の屈冤を冒士あり。内

小説、佞のをびあ（あ）。居え。聖明の累（たまご）と書く。奉とる。取上王へ夏きう。其後他事を以て韋眷（ゑけん）鎮守（ちんしゆ）の職へ罷ら（やく）。とぞ。

歐敬竹

歐敬竹（おうけいしゆく）ハ武進市（ぶしんし）の人口。古短く。大言を好め。生産無（なしふ）。城南の戈橋（ごばし）小居也。人のゐる所破とて扇を脩く。業とぞ。百錢を得。獨市（ひとりいち）の。飲む。大醉（だいざい）。古を巻く。歌へ。市中の入皆之を喫へ。甲申三月天子（てんし）の寔（こと）。事をうき。隣人を招き。共小曰遠（とほ）。とて。僕と別。我一杯の酒を盡せ。其妻壺（つぼ）を提く。來り。敬竹を見く笑て曰。斯言更と休よ。今舊官皆新官と作と聞。今。清朝も。やう。我ら如き者何をせん。敬竹曰。媼何を知らん。其工。此翁（おきな）が死（死）を故る

且と云ふ。竟戸を圖く自經く死ひけり。

石士鳳

石士鳳も武進市の人なり。家貧く妻子あり。略字を識モ。僕也。此僕も亦妻子あり。歐敵竹死へて後數日あり。士鳳肺脅瘍を買へて其先祖を祭ア。拜へて粗哭し。哭へて鄰人を邀へて。與ふ酒を飲る。昼夜かゝる。潛み家を出く。忠義祠の池中の身を投じて死ぬ。忠義祠ハ故宋信國文末祥及姚嵩。陳焰。王安節以下の十三人を祀り。又。所。姚陳の諸公ハ皆宋の末の城州を守る士也。城陷りて死也。其夏ハ宋史元の郡邑の元をえ。さく。士鳳が死せり。人の知る者あり。曉み及びく其僕も。市を哭へて曰。我主人死せり。戸を貰ひ。す。

み得ぞと。遂に池の旁に雙の履ゆゑをとちう。每く戸を得たり。是より前士鳳ひよぎ死せざる時。みづく紙を剪りて位牌とす。明布衣。石士鳳之位と書く。忠義祠うる十三人の下に置き。又其隣うる棺を賣者み三金を與へて曰。世亂もしく吾此金を用る所。姑汝ふ寄るうりと云ふ。後士鳳死へける時。棺を賣る者來ア。葬送の用意をそぞ為。其僕も終身妻を娶らざりけり。

凌國俊等九人

崇禎癸未の年。賊。賊え朝武昌地を破る。岳州名を襲ひ。遂に長沙地。小計八。司理。官名。日本蔡道憲力盡く危坐して待ひ。賊刃を手。名々。又。小断らんとする。怒罵をかまひ。賊其足を断ち。以て揮ふ。又。

を断く遂にづくふ断殺さる。天子命わく太僕寺少卿官の
官を贈り忠烈と謚し玉つて。初道憲がみやまうみほづく。凌國俊
等切くも九人の者道憲が従く去らむ。賊此者共をく道憲が降る
事を勧めむ。國俊曰我公節を屈まざる人うべ。吾等そくよく去く
今日を俟ドと云ふ。賊刃を以て之を脅せば復呴と曰吾等死を畏
ばくよくまく今日を俟ド。賊あせく之を殺す。内に四人が曰願つて
我主の骸を葬く後ふ死ふ就ん。賊義とく之を許す。時の四人衣を
解く道憲が屍を裹く。之を南郭地名南の外に葬り自刎く死む。國俊
が婦年少し。其子文志を撫でく節を守り居す。常の文志が向く父
の國の難が死せるるを悟る。文志執政の入のゆく行く歎き訴へ。松圓

俊を以て忠烈公の祠堂の附く配してあると見え。

蕭効用

蕭効用ハ漢上の蕭充案が僕也。宋孫景二と云者の田地を買ふ。
景二の佃をうきしめ。歳どふ其租を納し。一日効用主人の命を受く
租五十金を集め。家ふ帰るとく一里許と行く。景三衆と并路
かへく之を奪つて。効用官が至りて之を訟へたゞ。官急ひ之を捕
へんと。景二窘らじく又衆を集め。効用が夜宿せし處を同ひ炬を
列ねて四方を圍み。棒を下しろ。兩の如し。旁の一人の児者老嫗と一刀
ふ断く。蕭充案人を殺せりと大呼りやう。此の充案が露知らざ
るも。竟ふ囚らじて獄へ入る。死刑不行ひと。効用物狂ひの

如くうやく日夜走りありけれども為んすべし。らしく解せる者ふ遇く
いふせん好くさんと云へ事を解せる者給く曰。汝主人の代く死ぬ主
人の命生べし。効用使く大か喜び寃ふ陥る由を文ひあす。又密
か銀冶を頼みて一尺ぞりの刀を打せず之を佩び。さく遍く一族の者
み辭し。主人の婦の前み跪みて。そこかかへせ自愛へ玉へと云く。一語も
己う妻子の上み及べざりく。少く行きうる。時ふ按察御史ミナリヤシ 應公と
えふ入獄を歛スル。玉へ日ゆく。主人の蕭堯案セイエイ も蓬首カモヒ。囚人の中カム
在りて生ける人の如くうだ。効用其側カタこう此を伺スル。トガうるふ忍びカモヒ。忍
左のみ寃状カモヒを持て。右の手み利刃ツバを出ハシマ。大かゆぐ。天うる半孫氏
の老嫗カモヒを殺スル。者ハ堯案セイエイ が非アリ。斯り入蕭効用うりと云く自刎スル。血

カドウヤく御史の憲墀キニチを赤く。應公の繡衣サツイの激カモヒ。應公
大息カク。其状カモヒを署シテ。命タマ。入ハシマ。め負ハセマ。出ハシマ。目メを所
く正氣無カモヒ。口言ハシマと欲メジキ。如きる三日。幾ハシマ。死スル。兩ツと
轂カモヒ。少く正氣つきく。曰。吾死スル。主人生スルの哀カモヒ。得スル。徒死スル。
云ハシマ。守ル者告スル。曰。汝ハシマが主人已ハシマ生スル。憾カモヒ。と云ハシマ。効用遂ハシマ死
を年三十八ハシマ。時ふ按臺カタマより諸の監司カタマふ及ハシマ。憲カタマ。葬カタマ。續カタマ
を玉カモヒ。景カモヒ。捕ハシマ。獄カタマ。堯案セイエイ。免スル。家カタマ。帰スル。

孔四郎

勲衛カタマの名。嘗守經カタマ。鳳陽カタマの入ハシマ。優入孔四郎と云者ハシマ。愛カモヒ。客
らハシマ。孔四郎の紹興セウキウ地カタマの入ハシマ。文カモヒ通スル。誼カモヒを尚スル。嘗ハシマが恩情カモヒ。感

とく遂に身を寄て之の事へ嘗常縉紳の家へ入るが如き
孔四郎を伴ひ行く。嘗武職よりも家大の富めで。聞賊李自成
と聴く嘗四郎と謀く蓄てる金を他所へ瘞む賊將宮撫民と云
者を知り嘗と博く拷問。次に四郎を執え、責め向へ四郎已れ
を得ざ金を瘞る所を云。嘗は囚となりりて人共ふ害せざとぬ。撫
民四郎が嫁とく又丈ある以て座下ふ留めと愛を。翌日撫民にて
醉と四郎の歌へ一々樂し。夜ふ入て撫民が睡とゑて同ひ孔四郎潛
み刀を抜く刺殺えとゑる。心せよと撫民が股を刺す。撫民覺く
声とあぐく呼ぶ。四郎がそんどう遁るべくと知りて刀を提ぐ罵る曰
我嘗守經と骨肉の親も勝く。生死と同くせんる誓い奴其
遂に殺さる。

費宮入

費宮入を年十六を。何との處の人うるる不知らず。容も意を
勝とくめでてぞゑる。明の懷宗帝后の計で御女の長公主
帝の御女を公主の侍女とす。玉へ公主憐そゆる深きを。宮入帝の鳳
と云。賊が圍を乱る憂玉ふをえく。女心ゆり竊ふうりて密をうく。侍臣
王承恩か向ひく。表のありきを承恩。承恩曰汝深宮ふ居と心を知
く何ふうせん。宮入曰深宮ふ居るが故に知らるる表のうを預せん。彼



覺悟せん為ありと云ふ承恩意の之を寄と。斯く寝て燐ふ
あや。帝の憂ひゆく深けど、宮人承恩と同責るるも愈志か。
承恩曰汝へんぞ他人に向ひて、數我の私と向ひや。宮人曰朝臣
皆急すく一人も君と國を意ふ者なし。吾公が忠誠うら知り。故ふ相問のこと。承恩益奇と云。汝預計んと云其計更いん。宮人
曰り不幸きづば惟死せんのを。然より徒死せんべく。承恩曰古人の
詞ふ生る者と死する者と復生る者。生る者其言を食すんを信と智づべ。汝之を能せんや。宮人曰其時の至らを公
子々。茲ふ又魏宮入と云者あ。年費よろ長はく是も貌美
き。素より費と相善。費が言と聞く日汝が計甚成難い。吾も

難どきどろ能へず。其時小賊の脇のよび死のく忘のと伸べんのと云承恩
元之をも奇とも。甲申三月十九日。閩賊李自成都城を破る。王承恩
走く帝の報の。帝后と泣く御ひよび有の。宮中の人々び居
と泣ざる。后自縊の失せ玉の寵愛の袁貴妃のも同く縊の
ぬ帝劍を拔く妃數入を手の掛玉の公主を呼ぶのをやく。爾年十五
何ぞ不幸かく。我家の生のまのやとの玉の。左の袖の御の目の掩の若
の小刀を焉く。公主の左の臂の月の断玉の。是た公主死の矣の。帝
御手牒の殺の玉の忍びの。承恩と共の南宮の至の。萬歳山の
壽皇亭の登の御の縊の玉の。承恩もづゑの縊の玉の先の
け。時の尚衣監の尚衣の帝の御衣の類裁縫のを掌の役の。何新と云者。趨の宮

みへく帝と見ども見えさせひ。を、公主の地ふ付どせ玉ひ。他の
の宮入悉く遁とまく。費宮入の側の裏一居す。相共ふ救ひ奉
を。ぞうゑく、甦せ玉ひく公主のあへく。父帝我の死と玉へり。我何ぞ敢
く生を偷す。其う、賊至らば宮中と索めく我と捕へし。いふぞ遁
きるを得ん。宮人曰願つて公主の御衣を婢ふ賜へし。婢賊と訴く
公主を脱せしめ。落行を玉乃も何方か好らんと云ふ。何新が云因丈
の弟可うべと云ふ。公主の衣を宮人の與へ位く別を玉ふ。何新
の弟可うべと云ふ。公主を背ふ負ふまきと出ぬ。叔李自成へ承天門と破りて
宮中の乱入らんとぞ。魏宮入大呼と曰。賊大内へとす。我輩必辱
辱と受くる志ある者へ早く計りと爲らと云々。身と躍らむて御河

告白

凡そ此の卷中見返ハ勿論其他みて聊う余白あれば
或ハ猥褻なる畫圖を寫一或ハ車俚ある語辭を書一
其の甚しきよ至りて挿圖を彩りて却之を涴きみふべ
塗抹して、にて其の何と解能ひもふ至る者あり
何そ其れ思ひざむ。甚き乎夫れ此書藉ハ我が貸一
以て業とあひ所のりなう故に之を涴がさる。ふがての頗る
營業よ損害あり營業ふ損害あれた於てハ之ねづ償金を
要せざる可らば仍て豫しめ此ふ告白一置と云爾

新稿

長門屋主人識

